



Title	瓢箪から駒、もしくは反転する舞台
Author(s)	須永, 恆雄
Citation	明治大学教養論集, 534: (13)-(38)
URL	http://hdl.handle.net/10291/19859
Rights	
Issue Date	2018-09-30
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

瓢箪から駒、もしくは反転する舞台

須永恆雄

鼠の調理法さまざまについて各自の好みを言い募る内ついつい話がはずみ、こんな脱線の愉しい話題に議論沸騰して会議の席はひときわ喧しくなる、……こんな遺取りはさて何処かで耳にしたような、とそんな気がすること頻りであったが、それがタボリ版〈我が闘争〉に出来する食べ物談義であったとふと思いついた「Tabori」。この春惜しくも物故した高畑勲の反政府的映像作品の一節に対する、方や亡命ユダヤ人タボリの趣味好悪の談義は、常套的呼称に拠るなら不倶戴天の宿敵たるヒトラー御本人とその庇護者たる二人のユダヤ人との間で俎上に載せられる玉蜀黍の食べ方を巡る珍問答。両つながら、話の文脈はどうであれ、ことこのテーマとなれば共にそれこそ無私の情熱を傾けて心置きなく執心熱中できる、そんな一時を共有して稀有の時間を過ごす。ちなみに、前者は先祖伝来の居住地を人間という野蛮な存在、天地創造の神の被造物から一頭地を抜けた、何をやらかすか分からない、というより自分でもとんと承知していない、だからいつも遣りすぎて身を滅ぼす危険に瀕しつつも、それを地上生活の先輩たちとはつまり他者の生存圏を犯すことで、嘘偽りを臆面もなく行使して顧ない傍迷惑にもほどがあると言いたい勝手に剣呑な生き物によって、その先祖伝来の生存圏を奪われる理どもの、何とかこの天下の窮状に対策を講じようと古寺に集会しての切羽詰った議論のさな

かに出現した、これはかりは皆が生き生きと参加するのに余念のない話題であった。それに引きかえ後者は、これがタボリの卓見でもあるが、希代の悪の権化に祭り上げられると後はその相貌についてのいかなる議論も、恰もやんごとなき貴人の周りに巡らされるバリアもどきのものをめぐらして御法度とされる、というより汚らわしくて口の端にも上げられないと嫌われる余りか、その性状の具体的些事にはとんと触れられないという弊を、ともかく少なくとも一旦は糊上げにして、一人の人間としてプロフィールも具えたその相貌を想像し創造してみようとの試みの一端に出たものである。悪の符牒そのもののような黒一色の一面のみの存在、となる少なくともその前のヒトラー、総統ヒトラー以前の画学生志望青年ヒトラーが寒空に迷った拳句ようやく辿りついた帝都の、なるほどごく場末ではあるがともかく都の宿に、遙々辿り着いて駆け込んだ、そこでのいわば入門儀式の最中に交わされる、これまた真剣な議論のさなかの徒花、路傍の一輪の花のような、思わず食指が動いて飛びついた話題であった。

俳優なり劇作家なり演出家なりの月並みな呼称を嫌って、ただの「芝居作り Spielmacher」を名乗ったジョージ・タボリ——即ちハンガリーの出自のジュルジを改めてウィーンにゲオルクとなり新世界への亡命後その名をさらに改めて成ったジョージ——は、その紆余曲折の人生経路を辿って、二度と再びその地を踏むまいと誓った敵意と怨念の重畳堆積する故国ヨーロッパに不図した機会に偶々返り咲いて以来、ユダヤ人との紆余曲折との歴史を担うこの嘗ての帝都に自らの最良の成果を繰り広げたが、その頂点のほば最後を飾るべき『ゴルトベルク変奏曲』の舞台に於いて、両幕の間に舞台が反転するという絶妙の仕掛けをみせた。

すなわち、開口一番、何も無い空っぽの舞台こそは美の降り立つ場であると憚りなくも宣言して始まるこの天地創造の物語は、初演時の前後二部分に分けられたその両幕の後半が始まるや、舞台奥に広がる観客席への眺望に観客は度肝

を抜かれた。つまり観客は居ながらにして舞台上の俳優の視線から、つまりは舞台の中から客席の方を見遣る格好となる。とはすなわち客席の己を見遣ることであり、ここに自家撞着は極まり、また舞台をもう一度初めから、と宣言されて芝居ははねるのである。

同工異曲の舞台裏を取り込んだ演出として凶らずもベルイマンの『魔笛』が想起される。ここでもまた両幕の間の「中休み」として舞台裏が、すなわち楽屋にくつろぐ俳優⇨歌手たちの姿や、開演を待つ舞台の幕の内部が示される。ちなみに、ザラストロ役の歌手は、次の彼の演目の予習のつもりか『パルジファル』の分厚い総譜を繙いているのが両作の間の関連をも想わせて意味深長である。

ザラストロはもとよりついに、どこか得体の知れないところを残して終わる役柄だが、思えばこの作品総体が、夜の女王の委託に始まる一月月並みな御伽噺式の結構を呈しつつも、各役柄が、夜の女王とザラストロの対を筆頭に、多かれ少なかれ反転を免れない。もとよりその弊を蒙ること最も少ないのがパパゲーノで、ここには動揺しつつも終始人間味が保全されている。

さながら中世の教会建築に携わる職人も斯くやと想わせる入念な手仕事、差し当たってそれはA・ハルムをして希代の学び手と呼ばしめたほどの切りのない学習の成果として蓄えた楽理の蘊蓄を傾け、殆ど偏執に陥らんばかりの細心の注意を払って水も漏らさぬ構築を心がけて成った代物。その林立する交響曲の数々は、まさに建造物と名付けて憚りないものであるが、仕上がって後もなお、信奉する弟子たちの助言を容れての手直しにこれまた迂遠な時間を注ぎ込んで従事する。

恰も中世の工房のような集団製作の気配ありかと思いきや、むしろここでは師がすべてを司るといふより弟子に従うのか、そうみえなくもないふしすらある。もとよりその修正の助言が、必ずしも師の独自の理想像には合わない、どこか別のところから発したものであったかもしれないことは察するに難からず、とはいえ師は誠心誠意の弟子の忠言を拒まず、とはいえまたそれと平行して密かに原典を国立図書館に託していた、このことはしかし必ずしもその理想像の確固不動の揺ぎ無きことの証として済ますわけにもいくまい。

幾つかの曲の曰くつきの主題、すなわち何らかの靈感、というより超常の幻から齎されたという主題が稀なる、はれ、の訪れの徴であるなら、そのような霊を招き入れるための、いわば依代のようなものとしてその作品は開かれているのかもしれない。開かれて、とは即ち、閉じた完璧な品とは裏腹の、開かれた器。天意を掬いとるための器として空のま、に開かれている、ということである。そこに降り立つものに向かって、というより何か特定のものに向かうのではなく、全方位的に、不特定のものに移り得る、憑依し得る、そんな視線には、幾重にも重畳する輪郭が恵まれるかもしれない。満遍なく広がる日常の、いわば、け、の世界として遺漏なく備えを為すという良心的配慮によって設えられたそこには特異点を見出し難いがゆえにこそ、それはとくに範囲を限る踏ん切りがつかず、したがってどこまでも範囲を広げなければならぬ、その延長を然らしめている。

以下、そのような反転の契機を孕む仕掛けを期せずして実現することとなった交響曲作家ブルックナーの足跡を、対蹠者ブラームスと対照しつつ、辿ってみたい。(本稿ではとりあえず一八八九年七月から年末までを範囲に限る。)

一八八九年七月は三週目まで宮廷礼拝堂の義務に縛られていた模様が、いつもの暦への書き込みから察せられるが、その直後の二二日にはパイロイトへ赴いてこの年第一回目の『トリスタンとイゾルデ』（フェリックス・モットル指揮）に耳傾ける。それに先立つ二十日の暦に宮廷礼拝堂での務めに縛られる由の記述が見えるが、同日にはウィーンを発車する特別列車が仕立てられて凡そ三百人乃至四百人のヴァーグナー協会会員がヴァーグナー詣でに参加、晩の八時にパイロイトに到着したという。その中にブルックナーが加わっていたとすれば、日録暦帳に記された当番の務めの代りが首尾よく見つかったことになる。翌二十一日、今シーズン初回の『パルジファル』（ヘルマン・レーヴィ指揮）上演があった。二二日から二七日にかけてブルックナーは旅行に携えた帳面にその間に捧げた祈祷のことを記しているから、少なくともその期間はパイロイトに滞在したと察せられる。二三日の火曜にはパイロイトでヴァーグナー協会総会が開催されている。二四日は第一回めの『名歌手』上演がハンス・リヒターの棒で、また二五日には『パルジファル』第二回目の上演があったが、ブルックナーの楽譜の校訂をもやがて手がけることとなるJ・V・ヴェスは、このパイロイトの日々をこう伝えている、「パイロイトではこの時パルジファル、トリスタン、及び名歌手があったが、いずれも見事な完成された出来栄であった。パルジファルの後でブルックナーは目に涙を浮かべていた。トリスタンでも同様だったが、名歌手が果てた後は破顔一笑、引き続き撰った夕食の席でもことのほか御満悦で、ほとんどはしゃいでいると言っているほどだった。——パルジファルにはもう一度行った。上演後ブルックナーは我々若者たちを周りに集めて、驚いたことに劇場に戻った。皆に先立って、もう照明もほぼ落としてあった舞台に自信満々の態で上がったから、その場の警備係も敢えて彼と我々を引き留めて追いつくことが出来なかった。——そこにあったテイトウレルの屍の入った棺や、等身大を遙かに越えた頭部が私にはとりわけ目に付いたことが今でも彷彿とする。——舞台の背後から何段か木製の段々を下って、いわゆる〈奈落〉即ち舞台下に行くと、照明はいよいよ暗くなったが、構わずブルックナーは、『皆来たま

え』と大声で呼ばわり、先に立ってさらに一階分下へ下りるとそこはまさに地下の圏域であった。そこへ下り立って我々はしかしそれが何のためかほとんど分からなかった。するとやにわに誰かが叫ぶ『ブルックナーが消えた!』我々皆が声を揃えて『教授! 教授!』と叫ぶと、やおらどこからか弱々しい声が聞こえてきた『はい、はい! 私は此所だ』——我々は声を頼りに歩を進めるといささか驚きを禁じ得ないような状況下の先生をみついたのである。つまり湿ったというより濡れた地下水まみれの粘土の地面に跪いて両手でその粘土の中を掻き回している。愕然として私は、我が師が急に狂ってしまったかと思った。明らかに他の面々も同様の思いに駆られたらしく、懸命に彼を地面から立たせようとすると、執拗に抵抗するから、皆諦めて傍観する他はなかった。——ついに彼が汗まみれで身をもたげると、顔に粘土が分厚くくっつき、両手も泥だらけ、両膝には大きな泥の染み、上着の袖にも、カフスにも泥がこびりつき、何とも奇妙奇天烈な眺め。我々皆は大音声で大笑いせざるを得なかったが、先生甚だ御立腹で、喋るのが口に泥が詰まって不意ながら、我々はお小言を頂戴した。辛うじて聞き取れたのは、大先生が御自ら礎石を置かれた当の場所なればこそ、我々も今少し理想を弁えていれば益しだらうに、彼に倣って我々も亦、かくも貴重な思い出の品を持ち帰ればよからうに、と仰る。泥だらけの掌を開いて、泥濘の中から掻き出してきた煉瓦の欠片を見せてくれたから、ようやく訳が分かった。かくも壮大な思いつきと幸運にも成果があったことに感激している其の姿をみれば、我々ももう笑っては居られなかった。「貴重な戦利品とも言うべき『この煉瓦』を、と彼は輝かしい微笑を浮かべて宣言した、『私はウィーンに持ち帰る、私の机の文鎮にするのだ』」。

「君が我らが記念祭に来られなかったから

我らは我らだけでブラームスを祝った

いま我らは飲み、君のことを思う

此所クラウス・グロート広場一番地にて」

と、ブラームスがその幾つもの詩に曲をつけたグロートは、ハンブルク名誉市民に選ばれた友ブラームスに宛てて七月二日にキールから認めた。

Chronologie. 1. Bd. S. 579ff.
Goellerich. Bd. IV/2. S. 673ff.

Groth, Klaus: Briefe der Freundschaft. S. 125, S. 271.

一八八九年八月朔日にヨーゼフ・シャルクは弟フランツに健康状態を尋ねる手紙の中で、ブルックナーとゴルトシュミットとの会合のことを託つことしきり、のみならずまたフランツがブルックナーに肩入したことに不平を託つ。ブルックナーが平静を取り戻して事を見据え、ヨーゼフの真意を汲んでくれることへの希望を述べる。間髪を置かず翌日にフランツはこれに返信、ブルックナーについての兄の見解を然るべく説明すれば師の御機嫌回復の折も得られようと述べ、会谈での些細な葛藤はもっぱらブルックナーやゴルトシュミットの多少なりとも我儘勝手な発言のせいすぎないと兄を慰めている。

パイロイト詣での後は例によって古巣ザンクト・フローリアンに骨休めするのがブルックナーの習慣であったが、その地を根城に折々近場に出かけることを楽しんだようである。A・ビンネの記すところに拠ると一八八八年から九二年まではパート・イシユルに数日を過ごしたが、宿敵ブラームスもまた年来、夏の休暇をここに費やしていたことはよく知られている。湯治客名簿にもブルックナーの名が残されているが、湯治よりはむしろ彼のかつての同僚でその地の教師および保険局局长を勤めていたアットヴェンガー家に滞在するのが目的であった。同家で音楽家は祝祭的な歓迎を受けるのがつねであったという。

八月七日にブルックナーはグートマンに楽譜に就て色々注文を出す、「パート譜はパウアー以外の人には清書させないでください。何故なら演奏会後に総譜はさらにすっかり書き換えましたから、パート譜は新しい総譜から書き起こさなければなりません。(古いパート譜とは総譜はもはや全く調和しません。)

パウアーが総譜をレーヴェの閲覧なしに發送するなら、彼はそれについての保証を自ら引受けなければなりません。どうかグートマンさん、真剣にこのことについて相談するために、彼をもう一度呼びつけて下さい。(貴方の住所を彼に書き知らせてやって下さい。)パウアーは四区ヴィーデンのルイーゼ小路八番二の十五に住んでおります。

パウアーが、総譜をレーヴェに見て貰った方がいいと申すようでしたら、どうかそうするように勧めてやって下さい。それならばレーヴェが閲覧することに小生すっかり了解です。早くお元気になられますよう！

(つまり、パウアーが仮に完全には自信が持てない場合にはということですが)、パウアーを小生のところに寄越して下さい。」

十二日にはシュタイアの司祭アイヒンガーに宛てて、「お許しただければ、土曜にウィーンを発って貴殿を再び訪問致したいと存じます。差し支えあればその理由につき簡単にお知らせいただければ幸甚にて。」

同日にはまた、バイロイトに滞在中の腹心のゲレリヒにも認めて、「申し訳ありませんがもう一つお願を！ 是非とも知りたいのですが、(私たちが滞在した)市の塔の円屋根上部の尖塔は何で出来ているのか。丸屋根に接して、玉がついているのか、それとも飾り付の風見鶏か、違ったかな？ それとも——十字架か??? さらに避雷針か或いはそれ以外のものがついていたか？ 十字架か？

カトリック教会の塔の傍にあるのは何だったか？ 風見鶏だけで、十字架はなかったように思うのですが？

再々すみません、予め御礼申し上げます。どうか、万事メモに書き記してみてください。秋には是非ともそれを明らかにして頂きたい、我が最愛の友にして恩人に沢山申し上げなければならぬから。千回接吻を捧げる」

* * *

* * *

* * *

八九年八月十一日にブラームスはビルロートにイシュルから認めて曰く、「あれ以来、僕の第二信をハンスリックに発信した。フリッチュ夫人が御亭主共々、またおそらくは家族の面々を引き連れてこちらにお出で下さる予定、彼らはK・エリーザベトで下車。フリッチュ夫人はきっと君に会えれば喜ぶと思う。途中、僕のところ立ち寄り、尋ねて

くれる気はないかい、あるいはもうそのつもりでいてくれるのかな！」

フリッチュ夫人とは、クララ・シューマンの弟子の優れた音楽家で、またブラームスの熱烈な崇拝者でもあったが、マルセイユで結婚して永らく彼地に過ごし、ブラームスも彼女の縁でフランス訪問のつもりになったこともあった。

Chronologie. I. Bd. S. 580ff.

Goellerich. Bd. IV/2. S. 604ff.

Billroth. S. 447f.

一八八九年九月の暦にはブルックナー自身の筆跡で「クローゼ、フォックナー、シュヴァルツ少尉、ポイネリクス」と記入され、また別人の手跡で「フリードリヒ・エックシュタイン、グリーンツィングのシュロス・ベルヴェー」との記入。弟子たちの名前が列挙された後にウィーン郊外のワインの名所グリーンツィングのシュロス・ベルヴェー即ち望眺城というほどの意味の名で親しまれたグリーンツィング教会が並んでいるとなると、これはどうやら郊外に繰り出して一夕を楽しむ予定か記録か。

九月三日付でフェクラブルックのロザリア・フリーバーに宛てて「命名祝日に小生の衷心からのお祝いを申し上げます、神様が汝の傷をいやしたまわんことを！」と認めたのは、妹ロザリアの九月四日の命名日を寿ぐとともに、その長女がこの三月に結核で身罷ったことを慰めた文面であった。

十二日にはザイテンシュテッテンのドミニク・ドゥンケルから先頃（八月末日から）の訪問への礼状が来信、「我が親愛なる、ブルックナー様様！」

先の御来光のさいに貴殿から格別のお気遣いを賜ったことへの御礼をこれ以上怠って先延ばしにしては、まことに無礼の誹りを免れません。

かくなる次第にて今日ようやくにして貴殿に、親愛なることこの上なき友よ、数多の御好意に与りましたことへの小生の熱烈この上なき感謝の念を申し述べますことをお許しください。我が家族一同、お付き合いましたさまじい際の貴殿のまことに愛すべきお人柄と、また胸襟を開いて人を惹きつけずには置かない御性格に、まさに陶然となりました次第です。

若し貴殿の知見の一端をなおも頻々とお聞かせいただける折に恵まれますならば、と願わずにはおられません！その暁には必ずや小生ども一同、貴殿のお話しを傾聴致し、またそれを解する術を学ぶことでありましように。

小生ならびに家族一同より御挨拶申し上げますとともにまた近々の御訪問をお願い致します次第です、いついかなる時も大歓迎でございます、それが叶った暁には大いに名譽に思うこととございましょう。謹白頓首、貴殿の

誠実この上なき友

ドミニク・ドウンケル」

月末も近い二五日にヨーゼフ・シャルクは師に「これをもちまして、先生の御希望に従い、先生の第三交響曲の校閲に喜んで着手する準備が整いましたこと、また早急にこの仕事に従事致し、許可なしに手稿の恣意的な変更など一切致しませんことを、先生にもご安心いただくべく、申し上げます。

敬白

ヨーゼフ・シャルク」と認めた。

九月十三日にクララ・シューマンは滞在地バーデン・バーデンで日記に記す、「とうとうその日がやってきた、七十歳になる日が——喜ぶべきか？ でもそれは哀しい喜びでしかない。数多の愛が私をとり囲んでくれる、でもなんと数多の、既に亡くなってしまった愛する人々を我々は懐かしみ嘆くことか！

芸術家として老境に踏み入るのも亦、易しいことではない！ しかし結局のところ、子供らや友らの愛情のおかげで、私にとってこの日は祝祭の日となったのだ。朝食の卓で私は、小篋が届いて驚いたが、その蓋はベンデマンの絵で飾られ、彼はパレットを、彼女は花束をそれぞれに携えている。彼が描いた絵だ。さながら語りかけてくるようだ：私は深く感動した、まるで私の目の前に現れたかのように、この最愛の旧友たちがかくも愛すべきやり方で、即座にこの日の

祝祭への開始を告げてくれたのだ。：花籠が幾つもきりもなく到来した、最初の贈り物の一つが、この上なく美しい薔薇の籠が、(バーデンの)大公妃からのもので、感動的な手紙が随ってきた。朝食の後、ヴォルデマールが巨大な月桂樹の花束を携えてやって来た：子供たちは今、別室で大童で何かを拵える作業中、見事なものばかり、万事がとても貴重なもの：吃驚仰天するほど嬉しかったのはヴィルヘルム帝からの芸術勲章だった：一日中電報が引きもきらずに届き、皇后から、フリードリヒ皇后と、アンナ・フォン・ヘッセンから、またその他の方々からも。

午前が経過する内には、人一人では持ち切れないほど大きな花束：手紙も大量に届いた。

昼はゾンマーホフのところ。万事が晴れがましい：

就寝に際して私は一つだけ、一つだけ思うことがあった。もう何年か、子供らの愛を私が味わうことを天が許し賜わんことを、長患いに臥すことなく、喜びを享受する力を私の心臓がなお保たんことを、という願いであった。

A. B. Brief. 2. Bd. S. 56f.

Chronologie. 1. Bd. S. 582f.

C. Schumann. 3. Bd. S. 515f. S. 447f.

一八八九年十月朔日にブルックナーは弟子フランツ・シャルクに認める、「貴君の命名祝日は小生にとって格別の大切さを持つものです。衷心からの小生の祝福を快く受けてくれたまえ！ もとより貴君は芸術的に大変な高みに立っておられるのだから、小生の希望のとおり精進して、貴君の完全な健康を、できるだけ早くまた回復してくれたまえ！ これを達成すべく万端怠りなく励んでいただきたいと願いつつ、

貴君の長年の友

A・ブルックナー」

六日の日曜にはヴォテューフ教会教会音楽協会によって〈エアバール〉ホールで、ブルックナーの昇階唱が、クレッチュマンの指揮で上演されたが、この人はチェロと作曲と指揮を能くして、フィルハーモニカー「ウィーン・フィル」のソロ・チェリストを勤め、この年からはヴォテューフ教会の楽長の職にもついていた。この上演については〈祖国〉紙に好意的な批評が載った。曰く、「ここ三世紀来の音楽芸術に於いて果たされた大変革の数々は、こと宗教音楽にとつては無意味ではなかった、例えばフランツ・リストとアントン・ブルックナーが見事な作品に拠って示してきた通りである。その作品の数々は厳格な教会の精神を護りつつ、しかも芸術の進歩に能く適合し得ているのである。」

十一日にブルックナーはリンツの合唱団〈フロージン〉の指揮を勤めるW・フロデーラーに宛てて、「この歌詞が古風な音楽の内容と発声に適するものかどうか、小生は作曲家としてその判断を貴兄に委ねるほかありません。貴兄がつまり責任者だということです。それ以外の点では、オーストリアの人々が小生の作を幾らかでも歌ってくれることを、大いに楽しみにしております。貴兄の奥方の御手に接吻を、貴兄に御挨拶と接吻を、

貴兄の

A・ブルックナー」

その歌詞《歌人たちの盟約》を草したのはリンツの役人K・ケルシュバウムで、彼はブルックナーの写譜職人の娘を妻に得ていたが、その愛妻を前年十一月に亡くして

「親愛なる旧友よ！

昼は夜へと変わってしまった、深い夜へと、闇夜へと、親しき星一つ照ることのない闇へと。

私にまた曙が訪れることがあるうか？

君のお心遣いに心から感謝する

君の、深く心打たれた友

C・ケルシュバウム」とブルックナーに認めたことがあった。

二三日の暦への記入は珍しく情景描写で、「二三日から二四日への夜は窓を開けておく、夕方、戸外に針鼠」。二四日には「散髪と爪切り」と記す。「二五日には足の爪切り」

同じこの日には「二五日《赤針鼠》の露天の席でブラームスと」と、二度にわたる針鼠の記入が少々紛らわしいが、ともあれ「宿敵」同士の出会いの記述が認められる。つまり十月としては例外的に暖かな夜が続いたとみえ、それで「窓は開け」たままで寝たのであろう。また「露天」の卓に繰り出しているのブラームスとの会合となったのであろう。この出会いは両陣営の中でも思慮を弁えた連中によって、堪え難いまでに先鋭化してきた対立を和らげるべくアレンジされたものらしい。デチャイの報告によると、ブルックナーはかなり早くから取り巻き共々到着していたが、ブラームスとその郎党が姿を現す迄ずいぶん待たなければならなかったという。形式的な挨拶を交わすと、両陣営の面々は夫々席

に着いたものの、なかなか会話が軌道に乗らない。両親分は、氷りついたような沈黙からいっかな脱け出てこない。ついにブラームスがこの沈黙を破ったのは、メニューを所望することによってだった。強いられたような親密さをみせて、さあ、どんな食べ物があるかみてみようじゃありませんか! と言うと、メニューをパラパラ、突如止まると、「ああ、燻製の肉と水団「クネーデル」と酢漬キャベツ「クラウト」と、これが私の好物だね」。するとブルックナーはそっちを向いて、「そうですか、博士殿、燻製肉と団子と酢漬、これこそたしかに、私たちの考えが一致する点ですな!」と言ったのけたから、皆の哄笑が続いて響き渡った。しかし相互了解が訪れたわけではないことは、その後の会話の示すとおりであった。

ちなみにこの赤針鼠亭での会合の前後にもまた敵対する両陣営の出会いを重ねられた。A・ストラダールの語るころによれば、「私がブルックナーとレストランで同席した折に何度か、ブラームスがやって来て、私どもの卓に加わった。私は喋ったりする勇氣はもとよりなく、ただひたすら観察するだけだった。両先生が音楽の話をしたことは一度もない。日常茶飯事の話題のみ、互い同士の好物についてやり合った。

ブラームスはブルックナーに対しては甚だお高くとまっていた、心底冷淡だったが、一方ブルックナーは内心を曝け出して、甚だ不用意にもハンスリックの愚痴を言うほどだった! いつも私が苛々したのは、ブルックナーが頑なに心を閉ざしているブラームスにかくも献身的だったことで、一度などはまるでボーイよろしくビールを取りに行ったりもしたのだ。一度だけ両者の会話が険悪になったことがあった。第八交響曲の初演の後で、ブルックナーとブラームスが件のレストラン赤針鼠で顔を合わせた折に、ブルックナーはブラームスに、第八がお気に召したかどうか、尋ねたが、それに応じてブラームスは「親愛なるブルックナー君、わたしにゃ君の交響曲は解せん!」と答えたから、応じてブルックナーは「私には貴方の交響曲がまさにその通りですな」と言ったのけた」。

A. B. Brief. 2. Bd. S. 57f.
Chronologie. 1. Bd. S. 583f.
2. Bd. S. 203

“Vaterland” 1860-1911: Zeitung für die österreichische Monarchie.
http://anno.onb.ac.at/info/vtl_info.htm
<http://anno.onb.ac.at/cgi-content/anno?aid=vtl&datum=1889&zoom=33>
Goellerich. BD. IV/2, S. 688ff.

一八八九年十一月二日にミュンヘン音楽アカデミーからの手紙が届いた。

「ウィーンの作曲家

アントン・ブルックナー殿へ

拝啓ブルックナー殿!

本音楽アカデミーは貴殿の交響曲第四番変ホ長調を十一月二七日に演奏致す予定であります。今般、貴殿の楽譜出版業者のグートマン氏から、パート譜が未だ印刷出来ていない由の書信が参りました。

かかる事情に鑑み、もし手書きパート譜を今一度お貸しいただけましたら、目下の窮状を切り抜けるために大変助かります。もとより後ほど印刷完了しました暁にはパート譜を出版者から購入致す所存でございます。それが叶わぬ場合にはこちらと致しましては交響曲をプログラムから外さざるを得ないことと相成ります。

また一度交響曲のプロローベに貴殿御自らお立会いただくべくお時間と御苦勞を賜りますれば大変名譽に存じますがいかがでしょうか?

かかる小生のお願を叶えていただけますよう希望致しつつ、折り返しのお返事をお待ち致します

敬白

八九年十一月二日

音楽アカデミー書記

ヴィルヘルム・ベツチュ。

このミュンヘン音楽アカデミーとは、《魔笛》統編とも言うべきオペラ《迷宮》をものしたベーター・フォン・ヴィンターによって一八一一年に設立されたもので、今日なおバイエルン国立管弦楽団アカデミーコンサートとして存続す

る。またその書記ペッチュは同アカデミーの委員会委員を勤め、自らもホルン奏者であった。ところでこの書信は、外庄に苦しむのみならず、味方陣営内部にも不備がみられたこと、そんな一種の内憂外患にブルックナーが晒されていたことを推察させるに足る。

十一日には年下の友人レオポルト・ホーフマイアに命名祝日の手紙を認めて曰く

「大切な友よ！

私にとって大変に喜ばしい命名祝日に向けてあらゆる幸せと祝福とを君の為に願う！ 神が君自身の願を叶えたまわんことを！ 小さなポルデアルに私の代わりにキスしてやってくれたまえ。君の奥様にも心からの御挨拶を伝えてくれたまえ！

あのミヒエル奴はどうしてる？ すぐにその同伴女性を送ろう、トリオをね。君が勘定書を送ってくれるまで手付として十フロリン同封しておくよ。

楽（長）ハンス・リヒターは私の第一交響曲に口で言えないくらい陶然となったよ。泣きながら私にキスして不滅となることを予言すると、総譜を持って走り去った、写譜させて、定期演奏会で上演するのだ。驚き入ったよ！

ドルファアさんよろしく伝えて、フォン・リッターシュタイン氏の件の約束を叶えてくれるよう頼んでくれたまえ、まだ写真を受け取っていないのだ。

もう一度祝日おめでとう

A・ブルックナー

ウィーン一八八九年十一月十一日

ホーフマイアはシュタイアの楽器製作者の息子で、シュタイア市の役所に宮仕えしつつ、オルガンとピアノを能くし

た。ポルデアル即ちレオポルトの愛称はその息子のことである。また、ミヒェルの奴というのは、自作第八交響曲スケルツォ楽章のことで、これをドイツの野人というほどの意味合いのミヒェルと自らも呼んだが、この曲の写譜をホーフマイアが引き受けていたことから勘定書等々の言及がある。リヒターはこの文面にある通り、第一交響曲の上演を果たすが、それは二年以上経って九一年十二月十三日を俟たなければならなかった。またフォン・リッターシュタインはシュタイアでのホーフマイアの同僚、写真云々は例によって若い女性の写真をめぐることであったらしい。因みに手紙の受取人ホーフマイアの命名祝日は十五日、聖人レオポルトの日に当たる。ところで、この手紙の発信日十一日はといえ、偶々これは聖マルティンの日で、この日に、ホイリゲ即ち今年の新酒のワインが解禁となる。

翌十二日にフリーゴ・ヴォルフが妹ケーテに宛てた手紙にきっかり四四曲から成る歌曲集のことを記している、即ちスペイン歌曲集となる集のことであるが、その天変地異にも似る爆発的な速筆で仕上げられたことによって知られる創作にも、予め作曲予定の曲の完璧な設計図が脳裏に描かれていたことを窺わせるが、これは他の集にも該当するという。なお、二八日にはヴァーグナー協会の催しでフリーゴ・ヴォルフのリートがマリアンネ・ブラントによって歌われた。

* * * * *
* * * * *

クララ・シューマンに宛ててブラームスは認める、「貴方の指の下で僕の二短調ソナタが優しく夢見るようにそぞろ歩くとは、思うだに、余りに美しく、余りに親密な、…」

A. B. Brief. 2.Bd. S. 58f. S. 18

Chronologie. 1. Bd. S. 585f.

Walker. Wolf. S. 265

Clara Schumann. Bd. 3. S. 517f.

一八八九年十二月朔日、待降節の第一日曜日に当たる日に、第三回フィルハーモニー定期演奏会の一階立見席でブルックナーは一人の貴婦人に寄り添って常に優しく口調で近づきを求めた。その相手ヴァレーリエ・エードレ・フォン・ピストール嬢はウィーン音楽院でピアノを修めた妙齡の女性で、やがてベーゼンドルファー・ザールで開催されるそのピアノ・コンサートに彼は足繁く通い詰めることとなるが、例によってヴァレーリエ嬢とも写真を交換し合い、彼女はブルックナーの音楽の熱烈なファンとなり崇敬の念を手紙にも披歴している。ところで、翌年から始まったそのコンサートの数々は専門家筋からも高い評価を受け、のみならず貴族階級の社交界でも活躍し、また一九一二年にはロンドンはマルヴァイの音楽学校に赴く。戦争勃発により帰国、ハンガリー、クロアチア、北イタリアなどに足跡を残す。

四日にはプラハで第七交響曲の再演があり、九日にヨーゼフ・シャルクは弟フランツに認める、「クリスマスにこちらを訪問するという君のプロジェクトはどうなった? ところでもう今ならそれが実現可能か否か分かっているだろうが。それで君に頼まれた本や音楽関係資料をそちらへ送った方がいいかどうか躊躇っている。いずれにせよ十四日間居るなら、自分で持って帰るかどうか、君が都合のいい方を選んだらいい。こっちへ来られるかどうかははっきりしないから、そもそも僕の本や楽譜の内のどれが欲しいのか言ってお呉れたら、すぐに送るよ。一体全体まだピアノがないのかい? ピアノがあればもう随分捗っているだろうに。随分時間を空費したのじゃないかと推察する。

こっちは万事いつも通りだ。ママはおかげでまた随分よくなった。姉妹たちも同様だ。僕の健康も再びまた勢いを盛り返してきた。いちばん嬉しいのは、これまでにあんなにも暗雲に覆われてしまっていたブルックナー先生との人間関係が、今や完全に旧に復したことだ。まさに前にも増してずっと親密なものとなったのだ。彼は今やことのほか親しげに善意に溢れて君のことを話題にして、いつも君に就いて語ることしきりだ。僕も君の崇敬の念を彼にはっきり表明した。彼から君に暮れぐれもよろしく接吻をとのこと、いつまでも彼のかわいいフランシスでいつづけてくれ、とのこと

だ。彼はおそろしく仕事に精励して（大抵は夜分一〇時まで）、上機嫌で、いまだにあらゆる方面に希望を失わない。誰がこれほどの力を有しているものか！ともかく彼の姿を見ただけで誰もが襟を正さざるを得なくなる。今は金曜毎にキューブス通りの《子鹿亭》の会に集まる。そんな晩のことをきくと憶えているね、また我々の中心に君がいることが分かる。君を想ってすこす二、三時間が、一週間の内で僕にはいちばん活力の元となる。そんな時には、爾余の騒然たる世界の鬱陶しさを振り払うことが叶うというものさ。じつに我々は幸せ者だよ、我々が文化史上唯一にして最後の巨人にかくも親しく身近に接することを許されているとはね。ねえ、ブルックナーのためにも、なんとか君がクリスマスに来られたらいいのだが……」

十四日にブルク劇場支配人アウグスト・フェルスターはミュンヘンのヘルマン・レーヴィに、ブルックナーについて評価を乞う書信を認める。即ち後者がブルク劇場の楽長の地位に応募して、レーヴィの応援を期待してその名を志願書の中に言及したのであった。レーヴィは返信する、「我が親愛なる且つまた敬愛擱く能わざる友ブルックナーの真価をお認め下さり、貴殿の慧眼を慶賀すべきことと存じます。小生にとってかくも大切なこの名前を、名指しただけで人々の顔が憐憫の嘲笑いか軽蔑の洪面へと歪むの目にするのが小生の多年の習慣と化しておりました折から、貴殿がブルックナーの芸術的価値について素朴な質問をお寄せ下さいましたことは、まことにこれに優るクリスマスの喜びはございません……」

* * *

* * *

* * *

十二月一九日にヨアヒムはブラームスにボンのベートーヴェン祭への参加を促すが、年の瀬も押し詰まってブラームスは否定的な返事をする、「君は眉根に皺を寄せて思っただろう、彼だって昔は作曲より演奏を自慢にしたこともあつ

たのに！と。そうかも知れない、でも僕は名人として甘やかされたりしなかった、とくに、君が皆の手本として弾いたりしたことがないようにさ、君は、僕と同じく、何時だって自分のためだけに弾いたのであってみれば……」

A. B. Briet. 2. Bd. S. 59f.

Chronologie. 1. Bd. S. 587f.

Joachim. Bd. 2. S. 235.

本稿はJSPS科研費JP15K02190の助成を受けたものである。

引用ならびに参考文献

本文中の各章末尾に、以下の文献を括弧内の略号で示した。

また、その他にインターネット検索による資料については当該アドレスをアクセス日付を示した。

Tabori, George: Thaterstücke II. F/M. 1994. S. 346 (= [Tabori])

Bruckner, Anton: Briefe 1852–1886 (= A. B. Briefe)

Hellsberg, Clemens: Demokratie der Könige. Die Geschichte der Wiener Philharmoniker.

Zürich-Wien-Mainz 1992 (=Hellsberg)

Scheder, Franz: Anton Bruckner Chronologie. 2 Bde. Tutzing 1996 (=Chronologie)

Göllerich, August Auer, Max: Anton Bruckner. Regensburg 1936 1974 (=Göllerich)

Wessely, Othmar (Hrg.): Bruckner-Studien., Wien 1975 (=Bruckner-Studien)

Anton Bruckner. Dokumente & Studien. Hrg, v. Grasberger, Franz. 2. Bd. Graz 1980 (=Dokumente)

Decsey, Ernst.: Bruckner. Berlin/Leipzig 1921 (=Decsey)

Billroth, Otto Gottlieb: Billroth und Brahms im Briefwechsel. Berlin und Wien 1935 1991 (=Billroth)

Brahms, Johannes. Kalbeck, Max. (Hrg.): Johannes Brahms im Briefwechsel mit Heinrich und Elisabeth Herzogenberg.

Berlin 1908 (=Herzogenberg)

Brahms, Johannes. Moser Andreas. (Hrg.): Johannes Brahms im Briefwechsel mit Joseph Joahimm. Berlin 1908 (=Jo-

achim)

Litzmann, Berthold: Clara Schumann. Ein Künstlerleben. Dritter Band. Leipzig 1910 (=Clara Schumann)

Walker, Frank: Hugo Wolf. Eine Biographie. Graz-Wien-Köln 1953

(すなが・つねお 法学部教授)